



Title	寺尾東海の韻学と荻生徂徠
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 90-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69141
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

寺尾東海の韻学と荻生徂徠

岡 島 昭 浩

所難之喧嘩者、大賊夫人之子。

ということを書いている文献がある。すなわち、ある人の学説を徂徠の「韻槧」であると称して（「喧嘩」は寝言）高く売り、世俗を誑かしている盗僧がいるというのである。

そう言われば、徂徎の「韻槧」は、江戸時代の書籍目録類に見えず。韻学書を列挙した文雄『磨光韻鏡余論』にも見えない。

—

荻生徂徎に『韻槧』という書があり、『荻生徂徎全集』（筑摩書房）第二巻に収められている。同全集の解題（戸川芳郎）には、『韻槧』は、写本で伝わっていて、刊本は見ない。現在、調査しえた伝本は、二本。

一は、関西大学図書館泊園文庫に蔵する一本（以下、「泊園本」と略称）。

二は、国立国会図書館に蔵する一本（以下、「国会本」と略称）。

とある。

ところが、この『韻槧』について、

近有一盜僧、使其徒遊余門、学要略、而潛竊其秘、以雜喚嘆、題以韻槧、云物茂卿所著、以誑世俗、易而求高価、又更改題目、云己所述、以驕於人、可謂譸張為幻矣、不啻譸張為幻、

と、韻学書の収集に努めており、太宰春台と交渉があったのだから、徂徎の韻学書があれば手にできたのではないかと思えるが、見ていないようなのである（後掲の年表のように、現存「韻槧」識語は文雄が江戸にいたころである。『韻槧』の識語は享保九年で、徂徎は享保十三年に亡くなっている）。

徂徎に『韻槧』の書のあったこと自体は、服部南郭「物夫子著

述書目記」（宝暦二年記）に見える（後掲年表参照）。

琉球聘使記一巻、幽蘭譜抄一巻、琴学大意抄一巻、文變一巻、

韻繫一巻、滿文考一巻、葬礼略一巻、詩題苑一巻、南留別志

五巻、広象碁譜一巻。右十部一時戯作又小而辨物爾、不必當

弘行者

徂徠に『韻繫』という書があつたのは南郭の記録により伺えるのであるが、はたして現存の『韻繫』が、徂徠の書いたものであるのか、それとも、徂徎に仮託した別ものであるのか、考える必要があるう。

二

前掲の文は、『解経秘蔵要略』という書に見えるものである。

このあと、

夫浪華者、天下四通之地也、盜僧唱之、其徒和之、則毒流於四海、余不忍恝然見之、因欲刻解経秘蔵、公諸天下、以發其贋、而無橐裝之供其費、今聊称貸、先刻要略、自隗始云爾。と続く。この序文の筆者であり、この著の著者は、「讀州 東海 寺尾正長字子長」である。この人物については、『浪華郷友錄』（安永四年版⁽¹⁾）に、

寺尾伊織 土佐堀玉水町

源正長、字は子長、東海と号す、又扶桑園と号す、音韻學に精し

とある。

『解経秘蔵要略』は、この序文の書かれた天明元年に浪華書誌大野市兵衛（彫刻 川崎忠藏）によって刊行されている（博桑園蔵版）。内容は、

六書、字体変更、音韻、吸音律図、呼音律図、四声、四字一紐、或六字一紐總帰一入、五音、五音清濁、五音相通音、天地自然五音總括図、字音輕重兼備、韻母、八十四韻目、十二疇序、直音訓序、正直音訓、傍直音訓、同音訓序、正同音訓、傍同音訓、類同音訓、協同音訓、同韻訓序、正同韻訓、傍同韻訓、音義二合訓序、音義一合訓、合音訓序、合音訓、同字訓序、同字訓、借義訓序、借義訓、古音徵、四声動声訓、

からなる。大阪図書出版業組合『享保以後／大阪出版書籍目録』（一九三八）には、

解経秘蔵要略⁽²⁾ 一冊

作者 寺尾伊織 江戸堀二丁目

板元 秋田屋市兵衛 安堂寺町五丁目

出願 天明元年閏五月

許可 天明元年七月七日

とある。他に、この目録には、
韻鏡古音正図辨⁽³⁾ 二冊

作者 寺尾伊織 玉水町

板元 吉文字屋市兵衛 木挽町中之町

板元 河内屋喜兵衛 南久太郎町六丁目

出願 安永三年十一月

許可 安永三年十一月十一日

陰符經摘玄

作者 寺尾東海 農人橋一丁目

板元 藤尾弥兵衛 高麗橋一丁目

出願 天明八年八月

を載せる。

『韻鏡古音正図』は、国会図書館のみに蔵されている。整版本であるが、書肆名は手書きで書き入れられている。上巻が「韻鏡古音正図」、下巻が「韻鏡古音正図辨」である。下巻の内容は、

題例三章 正圖辨 韵母辨 内外轉辨 開合辨 五音辨 七

音清濁辨 四聲辨 字母辨 華音辨 輕重橫呼辨 反切辨

である。

前掲の要略序文に資金不足で出せなかつたとある『解経秘藏』は、天明五年に刊行されている。⁽⁴⁾三巻からなり、巻上は「要略」を増補したもの。巻中下に韻鏡四十三転を改訂した四十八図を載せる。中巻が二十六図あり撥韻尾を持つもの、下巻が二十二図あり撥韻尾のないもの、となつてゐる。

巻上の内容は、東海寺尾正長の安永四年の序に続き、石井一貫の天明五年の序（後刷には、寛政八年の羽富謙伯益の「解経秘藏大旨」がある）⁽⁵⁾のあと、

六書 形声論、仮借論、字体変更、音韻、四声論、四字一紐、

或六字一紐総帰一入、五音、五音清濁、五音相通音、天地自然五音総括図、字音輕重兼備論、韻母論、合韻八十四目、十

二疇、正直音訓、傍直音訓、正同音訓、傍同音訓、類同音訓、協同音訓、正同韻訓、傍同韻訓、音義二合訓、合音訓、同字訓、借義訓、古音徵、四声動声であり、「要略」とほぼ共通するが、『解経秘藏』には、徂徠など

の名や剽竊のことは見えない。

『国書総目録』未載のものとして、九州大学文学部蔵の『三音矩』がある。写本、大本二冊で上下一巻、上は墨付^{37丁}、下は¹⁸丁、上巻卷頭に、

鳴昌永 東海新先生著 浪華 蕃右美 同校

青嘉平

とあり、下巻卷末の跋文に「安永元年之春 新正秀識」と見える。

本文中に「余が韻鏡古音正図」とあるところから、寺尾東海の著に間違いないが、この識語の時点では、韻鏡古音正図は未刊であつた。この書には、

京師の沙門文雄と云者、春台先生に從て音韻を学で磨光韻鏡を著せり。其三音を見るに正音を知ることなし（上7ウ）

など、文雄への攻撃が多く、太宰春台についても、台翁は徂來先生に從し故、経学は少く美なれ共、韻には甚疎き人也

としているが、徂徠の韻学についての言及はない。

なお、東北大狩野文庫蔵の『説文字母考』は「南宮隱士貫道

南宮金閣主人貫道補遺 寺尾正長子長学」とあるもので、韻学

に関する言及は見あたらない。静嘉堂文庫蔵の『用辞則』は未見である。

徂徠のものでもなく、東海のものでもないが、本稿で示すべき文献として、『唐韻指迷』というものがある。これには、徂徠の韻学についての言及がある。湯沢（一〇〇六）で、『韻槩』につ

いて、「後の書にこの書の名前が現れているという報告を聞かない」としているが、この『唐韻指迷』は、書名こそ出てこないものの、「徂徠翁」とあるものは、『韻槩』に見えるものである。

『国書総目録』では、「大阪出版書籍目録による。」とするのみ。

岡島藏。小本一冊。寛政己未十一月、蘆洲小田真卿序、尾形貞斎自序。内題には「摂城後進尾形居平貞斎述」とある。『大阪出版

書籍目録』にも、

唐韻指迷 一冊

作者 尾形貞斎 古金町

河内屋太介 雛屋町

願 寛政十一年十月

許 廿七日

とあり、内容は、

音韻探正之辨 四声之辨 附唐音相通例 内外転輕重秘圖 内

外転輕重秘訣 五音之辨 協韻之辨 入聲字転平例 唐韻秘訣

唐韻秘伝 国字韻鏡反切之口訣 漢音反之訣 唐韻雅俗之辨

正直音訓 五音清濁韻母輕重皆同
傍直音訓 五音清濁輕重皆同 而韻母相通

正同音訓 在四字一紐中

錄】寛政二年版に、

田真卿、字淳夫、号蘆洲、順慶町壱丁メ、小田貞庵

とみえ、三沢諄治郎『韻鏡諸本並に關係書目』で「韻学図解」「韻学蘊要」（ともに、三沢氏蔵）、国会図書館蔵の『韻鏡一家言』が載せられる。

『韻鏡一家言』は巻末に天明六年とある写本である（門人山中豊子亨校）。内容は、

漢音與音、五音七音、五音總括図、四声、韻母、字母、内転外転、清濁、輕重、開口合口、經史音积、反切弁解、反切名义、反切頌、反切五法（音和、双声、疊韻、類隔、往還）、駁六例（寄声、寄韻憑韻、広通偏狹、憑切）

である。『日本漢字学史』でも言及されるように、徂徠の名が、「本邦近歳徂徠先生春臺先生ありて最も韻學に精しく音釋も殊に詳かなり」とある程度だが、後に引くように、『韻槩』『解経秘藏』と通じる部分がある。

三

さて、『解経秘藏』（ならびに『要略』）には、中国古典における訓注を分類した、「十二疇」というものがある。『解経秘藏』によれば、次のようにある。

とあるものである。著者の名は、通俗西遊記の翻訳者の一人として見られるものである。序を書いている小田真卿は、『浪華郷友

傍同音訓 *

五音清濁呼吸皆同。而傍紐

類同音訓

五音清濁皆同。而呼吸異紐

協同音訓 *

不問呼吸。唯五音同。而清濁異紐

正同韻訓

不問五音清濁唯輕重同。而列于一韻母

傍同韻訓

不問五音清濁唯輕重同。而列于通韻母

音義二合訓

一字兼二義者。以二字訓之

合音訓

二字存一義者。以二字代之

同字訓

不假他字音韻訓狀。直用其本義

借義訓

不借音韻唯借同義訓之

(「*」については後述)

これが『韻槢』の「十鱗」と、よく似ている。「正直音訓」と、『韻槢』で、それに対応する「經正音法」を並べてみる。

易曰。晉者。進也。又曰。離者。麗也。論語曰。政者。正也。孟子曰。征之爲言正也。又曰。洚水者。洪水也。【史記作鴻水。】又曰。仁者。人也。【又出中庸。】

右經正音法【五音清濁輕重。韻母。皆同者。以是相訓。】

易曰。晉。進也。嗑。合也。離。麗也。論語曰。政者。正也。孟子曰。征之爲言正也。又曰。洚水者。洪水也。【史記作鴻水。】又曰。仁者。人也。【又出中庸。】

上記のように、挙例も含めて似ている。「正直音訓」「經正音法」以外について、その対応を示すと次の通りである。

『韻槢』十鱗
『解経秘藏』十二鱗

『韻槢』

『解経秘藏』

一、經正音法

正直音訓

二、經旁音法

傍直音訓

三、經同音法

正同音訓

四、傍同音法

類同音訓

五、緯正韻法

正同韻訓

六、緯傍韻法

傍同韻訓

七、音義和合法

音義二合訓

八、合音詰法

合音訓

九、同字詰法(直用本訓)

同字訓

十、借義詰法

借義訓

「傍同音訓」と「協同音訓」が、『韻槢』にはないわけである(十
二鱗を挙げた際に*を付しておいた)。

右五音清濁。韻母輕重。皆同。名曰正直音訓。『解経秘藏』

次に、四声の条を見る。『韻槢』で、

四

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無

有低昂。謂之平聲。韻昂於音。謂之上聲。韻低於音。名之去

聲。韻尾迫斷。名之入聲。四聲之等。韻異音同。故謂之四聲

一音。四聲以音紐之。故名之四字一紐。四聲之名。雖起乎沈

約。然其實在古。徵之毛詩老子韻。大抵四聲各存。唯古之用

聲。非如後世韻書限之者。且如舌字。古有平音。今唯入聲。

其義見說文。釋名亦論之。可以觀已。

とある部分が、「解經秘藏要略」では、

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無

高卑。謂之平聲。韻高於音。称之上聲。韻卑於音。名之去聲。

韻尾短促。号之入聲。四聲之位。韻異音頭同。故謂之四聲一音。四聲以音頭紐之。故又謂之四字一紐。(中略)四聲之名。雖出乎沈約。然其實在古矣。六經諸書韻。大抵四聲各存。

(中略)古之用字。通于四声。協於五音。非如後世韻書限之者。雖出乎沈約。然其實在古矣。六經諸書韻。大抵四聲各存。

『解經秘藏』では、
平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無高卑。謂之平聲。此春之氣也。韻高於音。称之上聲。此夏之氣也。韻卑於音。名之去聲。此秋之氣也。韻尾短促。號之入聲。此冬之氣也。四聲之位。韻異音頭同。故謂之四聲一音。四聲以音頭紐之。故又謂之四字一紐。(中略)四聲之名。雖出於沈約。其實在乎古矣。六經諸書韻。大抵四聲各存。(中

略)古之用字。通于四声。

また、『韻鏡古音正圖』でも、

平上去入。謂之四聲。四聲之出。猶四時之運也。調音貴其和平。故初發声為平声。斯春之氣也。高呼猛烈強為上聲。斯夏之氣也。過去哀遠為去聲。斯秋之氣也。短促急收藏為入聲。

斯冬之氣也。

となつていて、多くの部分で共通している。「唐韻指迷」には、徂徠翁曰、音韻均呼。無低昂。謂之平聲。韻昂於音。謂之上聲。韻低於音。謂之去聲。韻尾迫斷。謂之入聲。

とし、是実に骨髓の説。諸子の説く所に似ず。
と評価している。

小田真卿『韻鏡一家言』には、

平上去入。名之四聲。四聲之出。猶四時之運。音韻均呼。無低昂者。謂之平聲。韻昂於音。謂之上聲。韻低於音。名之去聲。韻尾迫斷。名之入聲。(中略)四聲之等。韻異詩音同。故謂之四聲一音。或縱呼一音也。四聲以音紐之。故名之四字一紐。

とあるが、「解經秘藏」とも「韻鑑」とも書かれていない。

さて、このような四声の記述は、康熙字典に引かれることが知られる、

平聲平道莫低昂、上聲高呼猛烈強、去聲分明哀遠道、入聲短促急收藏

との関連があると見られる。上声や去声については、より具体的に示されている。すなわち、上声は「韻が音よりも高い」というのは、上昇調であることを示し、去声が「韻が音よりも低い」というのは下降調であることを示している。『唐韻指迷』では、康熙字典の記述を引いた上で、それらに比して徂徠の説を高く評価している。康熙字典に引かれる上掲の記述自体は、唐宋の頃からであろうと言われるが、これが日本で知られるようになったのは、康熙字典に載せられてからであるうと思われる。『韻鑑古義標註』

の補遺卷（元文三年）に

康熙字典云、平聲平道莫低昂、上聲高呼猛烈強、去聲分明哀
遠道、入聲短促急收藏

と引用されるのが早いところではなかろうか。その後、「磨光韻鏡」でも引用される。このように四声の調値を漠然としたものであっても示したものは少なく、これの他には、『元和韻譜』の「平聲者哀而安」のようなく、高低を示さないものしかない。

康熙字典は、康熙五十五年の成立。日本の享保元年にあたる。享保五年には日本に渡ってきていたようであり、享保十一年の

『韻鑑古義標註』でも利用されており、「享保九年甲辰八月」（一七二四年）という「韻槩」（徂徎の歿は享保十三年）に引かれているのは、不可能ではないが、かなり早い影響と言うことになる。しかも、そのまま引くのではなく、影響を受けたというような形になっているのが、気になるところである。

いくら、徂徎が唐音を学び、唐音で經典を読むことを薦めたと

はいえ、自身で唐音を観察したことだけから四声の上がり下がりを記述した、というのも考えにくい所である。韻書の四声と現実の声調との対応関係は単純なものではなく、もし現実の声調を記述するのであれば、例えば、陽平と陰平についても言及があるはずである。徂徎学派に唐音を教えた岡島冠山も四声については、韻書の四声を示すだけで、当時の声調や、その上がり下がりについての言及はない。

五

『韻槩』の「国会本」では、本文の後に、図が十一ある。これは、韻鏡古音正図と対応している。

○韻槩附錄

内転第一

内転第二

内転第三

内転第四

内転第五

内転第六

内転第七

内転第八

外転第一

外転第二

外転第三

○韻鏡古音正図

内転第一

内転第二

内転第三

内転第四

内転第五

内転第六

内転第七

内転第八

外転第一

外転第二

外転第三

外転第四

外転第四

外転第五

外転第五

他の荻生徂徠の韻学書としては、湯沢（一〇〇六）も指摘する
ように、

○「韻鏡抄」〔片玉集〕八十五 宮内庁書陵部藏、津村正恭編、
安永（寛政）国文学研究資料館マイクロフィルムによる

直音拗音図、五音五位次第、七音總括図、三十六字母帰納助

紐字、韻鏡帰字例、六対十一反、五音（開盍に出）、韻鏡頭
書（大田氏作）

○「護園遺編」卷之四 『荻生徂徎全集』第十八卷⁽¹²⁾

といったものがあるが、『韻槩』との関連は見出しがたい。⁽¹³⁾

六

以上、荻生徂徎と寺尾東海の韻学について比較してきた。徂徎
は著名な人物だが、東海は無名である。単純に見ると、徂徎の韻
学を東海が真似たものとみることも出来そうだが、『解経秘藏要
略』の序文に言うように、東海の韻学を徂徎の韻学であると誰か
が偽った可能性もあるように見える。

もし、「韻槩」が徂徎の考え方を伝えるものであつたとしても、
寺尾東海や尾形貞斎、小田真卿等の書は『韻槩』の異文を伝える
資料としての価値を主張することが出来る。

これは『韻槩』の「六則」によるものである。

同じく、「徂徎翁内外転輕重音秘訣」⁽¹⁴⁾は、『韻槩』の「韻母通韻

吳音者。吳人沈約所呼。唯牙音次濁有之（誤脱アラン【徂徎
全集校者の付記】）。此風土之所致。莫如之何已矣。牙音次濁。
自同于唇喉次濁。吳人以喉音全清呼之。其説見韻會。（韻槩）

吳音者。吳人沈約所呼。惟牙音次濁有之。韻會韻例曰。吳音
角次濁音。雅音羽次濁音。是也。牙音次濁正音。自同于唇喉
次濁。以喉音全清呼之。其説見韻會。（解経秘藏要略・音韻）

吳音者。吳人沈約所呼。比諸漢音自不正矣。故不正音者。總
稱吳音。牙音次濁必有吳音。牙音次濁正音。自同于喉音次濁。
以喉音全清呼之。斯吳音也。 （解経秘藏・音韻）

吳音者。吳人顧野王沈約所唱。唯牙音次濁有之。韻會音例曰。
吳音屬疑母字、迺雅音屬喻母者。吳音角次濁音。雅音羽次濁
音。是也。此吳人水土之所致。不知然而然耳。按牙音次濁音。
自同于唇喉次濁音。 （韻鏡一家言）

というように、徂徎全集の校訂に於て「誤脱あらん」とされた箇
所の異文を見ることが出来るのである。

『唐韻指迷』には、他にも『韻槩』の影響下にある部分がある。
徂徎氏曰、字音清濁あり、輕重あり。此を知らざる時は曖昧
たり。

97

図」(徂徠全集の六七六～六七七頁)に相当する。

略年表

1716	享保元年	康熙字典刊
1724	享保九年八月	韻鏡識語
1726	享保十一年	文雄、江戸を離れ京都へ
1728	享保十三年一月	徂徠没
1744	延享元年	春台による磨光韻鏡序
1753	宝暦二年	荻生徂徠『中庸解』版本巻末「物夫子著述書目記」に「韻鏡」
1763	宝暦十二年	文雄没
1772	安永元年春 (同貞刻)	『三音矩』 識語 新正秀(九州大学文学部 藏)
1773	安永一年夏五月	『韻鏡古音止図』 有馬正邦(彦直)序
	安永一年秋重陽	『韻鏡古音止図』 有馬正邦(彦直) 識語
1774	安永二年夏	『韻鏡古音止図』 野口長通(伯通)序
1775	安永四年秋九月	『解経秘蔵』 東海寺尾正長序
1781	天明元年閏五月 (同貞刻)	『解経秘蔵要略』 東海寺尾正長字子長序
1785	天明五年正月	『解経秘蔵』 刊 皇都書林六肆と「浪花大 野木市兵衛」
	天明五年夏五月	『解経秘蔵』 石井一貫堅(鏡山)序

注

(1) 近世人名録集成、勉誠社。

(2) 『開版御願書扣』では残っていない。「陰符經摘玄」も同じ。

(3) 『大阪本屋仲間記録』第十七卷一四〇頁では「韻鏡古音止図」。

(4) 『国書総目録』で「大阪府石崎」が「安永四版」となっているが、大阪府立中之島図書館石崎文庫本も天明五年の刊記があり、安永四年は序の年記をとったものと思われる。

(5) 岡井慎吾『日本漢字学史』で、「此書既に梓行すれども世に學ぶ者少し」とて、色々大旨の一篇を添へたも皮肉だ」と評されてい

(6) 『日本漢字学史』に引く、岡井氏による訓説。

(7) ここでの「音」は頭子音の意味であり、頭子音と韻母の高低を比較することで上昇・下降を示しているわけである。

(8) 劉復『四声実験録』。

(9) 劉復『四声実験録』、小西甚一『文鏡秘府論の研究』、金田一春彦『国語アカセントの史的研究』、高松政雄『日本漢字音概論』など。

(10) 『日本古典文学大辞典』「康熙字典」の項（倉田淳之助）による。

(11) 四声についての引用は元文の増補の部にあるが、康熙字典の他所からの引用は、元文の増補でない、享保の原刊本にも見える。

(12) 解題（日野龍夫）では「『韻鏡』の注釈書（恐らくは宝永二年刊の『韻鏡諸抄大成』）の用語を見出しのように標記して、それについて説明を加えた卷である」とするが、「韻鏡諸抄大成」であるとの認定の根據は不明である。

(13) 岡井慎吾「論語微にあらはれたる音韻論」（『柿堂存稿』）もあるが、「韻槩」等との関連は見出しがたい。

(14) 「此れ甚だ秘する所なりといへども柱げて公世を慮る」とある。

参考文献

岡井慎吾（一九三四）『日本漢字学史』明治書院

三沢諄治郎（一九五一）『韻鏡諸本並に関係書目』著者自刊

湯沢質幸（一〇〇六）「近世韻学における吳音漢音の分類と韻鏡—徂徠と文雄—」『筑波大学地域研究』第二七号

付記

本稿は、第三回中部日本・日本語学研究会（一〇〇三年五月一〇日刈谷市産業振興センター）で発表したものと發展させたものである。引用に際して、片仮名を平仮名にあらため、漢字も通用の字体に

改めたが、「韻槩」の「槩」字など、もとの字体を残したものもある。本文中に示したものと他に、『解経秘藏』は、家蔵本・九州大学蔵本・大阪府立中之島図書館本等によった。

校正時付記

平声を「無低昂」とするなど、四声の調値に言及する記述が、湯浅重慶『韻鏡問答抄』に見られた。貞享四（一六八七）年の刊であり、『康熙字典』よりも古い記述である。

（おかげさま・あきひろ 本学大学院准教授）